

東奥の西郷といわれた人格者 菊池九郎きくちくろう

「是非とも、藩公にお目にかかり、わが弘前藩の状況をつぶさに申述べた上で、その助力を願うのだ。いいな。」

「はい。わかりました。」

「今夜にでも、すぐ出発せい。わしは、そなた達の帰りを、首を長くして待っているぞ。」

家老西館宇膳うぜんにこう言い含められた菊池達は、旅支度もそこそこに、直ちに弘前を出発した。

一八六八年（慶応四）の六月三日。奥州の白石で奥羽二十七藩の重臣会議が開かれ、奥州の主な諸藩は徳川方として官軍に立ち向かうことになった。しかし弘前藩の隣の秋田藩は、かねてより徳川に恨みをもっている事から、おそらく官軍方につくに違いない。そこで弘前藩としては、庄内藩（山形）と協力し、秋田を挟み討ちにしよう。菊池喜代太郎、本多徳蔵、石郷岡左司馬さじま等は、その使者として庄内へ向かったのである。

当時、奥州の諸藩は、佐幕（徳川方）につくか、薩長（官軍方）につくかで大きく揺れていた。長い間の徳川の恩顧に應えるべきだ。いや、時代は変わった、今こそ幕府を倒して新政府をつくるべきである。と、その議論も二つに分かれた。今までのいきがかりから、なんとなく、

というのから、情勢をよく分析した上で、という慎重論まで。しかも、この動乱の中にあつて、今後藩が生きのびていくには、果たしてどちら側につくのが有利なのか、という問題もあつた。それにしても、中央の状況がどうなっているのか、よく伝わってこない。その為、昨日までは佐幕派の意見が強かったのに、きょうは官軍方への賛成意見が強くなる、ということもあつた。佐幕方についた弘前藩は、同じ意見の藩と「奥羽列藩同盟」を結び、北上してくる官軍へ抵抗しようとしたのである。

庄内についた菊池や本多等は、直ちに藩主の酒井忠篤公に面謁を願うと、徳川方に決定した弘前藩の事情を説明し、この際両藩が同盟を結んで協力し合いたい、その為にも蒸気船と兵器を貸して頂きたい、と熱弁を振った。これを聞いた酒井侯、その熱情に感服して、津軽、庄内両藩が協力する事を約束。蒸気船の貸与は無理だとして、銃二百挺を貸してくれる事になった。しかも一行の庄内滞在中は、頗る^{すぶ}丁寧なもてなしをうけたのである。こうして無事大任を果たした一行は、酒田港で船を雇うと、二百挺の銃をつみ込んで、意気揚々と深浦港へ向かったのである。

さて、菊池らが庄内へ行っているその留守中、藩では事情が一変していた。京都から用人の西館平馬が、朝廷からの密勅を藩公に届けたのだ。これによって中央の状況を再検討した藩の重役達は、これ迄の立場を変え「官軍方につくべきである。」と叫びだしたのだ。佐幕か官軍か、大もめにもめた結果、最後は藩公の決断で、奥羽同盟からぬけて官軍方につく事に決まったのである。勿論、朝廷方につくといつても、

天皇に対する忠誠心からではなく、大勢が幕府方に不利だと判断した結果であった。

帰藩してこの事を知らされた菊池らは、大いに怒った。「これは、奥羽の列藩、とくに庄内藩の信義を裏切るものだ」と、重役に脱退の取り消しを強く迫ったのも当然のことであった。しかし、一度決まった藩の方針はもはや変えることが出来ないといわれると、血気にはやる菊池等は、「この上は、藩をとび出して、庄内藩の仲間と行動を共にするしかない」と、藩主や重臣の止めるのも聞かずに、脱藩の上庄内へ走ったのである。藩の方針が変わった事を深く詫びた上、一同申し訳のために腹を切ろう、という覚悟であった。菊池二十二歳、本多は二十一歳という多感な年頃であった。

庄内藩では、菊池等の決心を漸くの事でおし止どめ、手厚くもてなしたので、彼等は、しばらくの間庄内に滞まり、せめてもの恩返しにと、一緒になって官軍と戦うなど、庄内藩の為に働くが、やがて戦争も終わり大政奉還となったので弘前へ帰る事になった。然し、藩では、脱藩者として処罰することはなかった。藩としても、信義を重んじての彼等の行動を責めるわけにもいかず、また彼等の能力や行動力を高く買っていたからでもある。

許されて帰藩した菊池は、喜代太郎を九郎に、また本多は、徳蔵を庸一と改名した。

喜代太郎（九郎）は、一八四七年（弘化四）、弘前の長坂町で、菊池新太郎の長男として生まれた。幼い頃父に死なれたが、母が賢い人で、三男二女の姉弟達を立派に育てあげた。九郎は十二歳の時藩学校の稽古館に入学したが、同じ頃、徳蔵（庸一）も入学しているので、彼とは机を並べて学んだ学友ということになる。ただ、十二歳ですでに、大学、中庸、論語を学んでいたという秀才の徳蔵に比べ、喜代太郎には、学問の面で頭角をあらわしたというような話はない。むしろ「少年時代は大変に気むずかしく、学校が嫌いでも母にダダをこねるので、隣家の成田茂（珍田捨巳の姉婿）」という人が、イヤがる喜代太郎をなだめすかして、学校へ連れて行った」という面白いエピソードがある。少年の頃の喜代太郎は、不登校児童であったというわけだ。こんな喜代太郎が、学問を好み、人格修養に励むようになったのも、みな、母喜久子の愛情と教えによるものだという。

母の喜久子は、若くして夫を失ない、多くの子供を抱えて苦勞をしたが、独学で経伝史書を学び、のちには東奥義塾女子部の教師をつとめるなど、努力の人であった。

学生時代の喜代太郎や庸一は、気に合った同志が集まって、よく議論し、かつ語り合った。

「多数の友人達が会合し、晩飯を食べた。冬はタラの味噌汁や鮓（にしん）の塩焼き、菓子といえは煎餅かコゴリ豆。それを食べながら深夜まで語り合った。議論に熱中すると、互いに声が大きくなって掴みかかったりする。そんな時、いつもニコニコと笑っている徳蔵が仲裁に入ると、す

ぐ納まった。」これは『本多庸一伝』にある一節だが、学問について、また日本の将来について真剣に語り合っている若い彼等の様子がわかる、微笑ましいエピソードである。

ところで、帰藩を許された九郎は、一八六九年（明治二）、藩主に従って上京、慶応義塾に入学する。当時の慶応義塾は、入学希望者が多く、この時には僅か三名しか入学を許されていないのだが、九郎はその一人に選ばれた。ここでの留学は僅か一年間だったが、この時福沢諭吉から受けた影響が、のちに東奥義塾を創設する大きな力となったことは間違いない。

翌年、こんどは鹿児島藩の英学校に入学して英語を学び、そのあと兵学校で砲術や兵制をも学んだ。この鹿児島留学中、西郷隆盛から受けた影響も大きく「私の人格修養の目標は、西郷隆盛その人に、いくらかでも近づきたいところにある」とまでいわせるようになったのである。

留学から帰った九郎は、一八七二年（明治五）二十六歳の若さで、藩の漢英学校の校長となるが、この学校も廃藩置県の影響でまもなく経営困難となった。そこで、これに代わる私立学校の必要を感じた九郎は、東奥義塾を創立させることにした。東奥義塾という名は、福沢諭吉と慶応義塾教師の小幡篤次郎による命名だといわれる。教授には慶応義塾の教師だった吉川泰次郎をはじめ、この塾で学んだ地元の俊才達を集めた。校風や教授法は、当然のことながら、慶応義塾の影響が大きかった。そして一八七四年（明治七）、本多庸一を塾長に迎えてからは、

学校経営も全く軌道にのったのである。

当時この辺りには、他に高等普通教育のうけられる学校がなかったこともあり、義塾には、県内各地の秀才が集まってきたのだった。

一八八九年（明治二十二）は、日本にとって、まことに重要な年であった。二月十一日には憲法が發布され、四月には全国三十一の町に市制が施行された。弘前もその一つであった。

「先生、初代市長には、是非とも先生になって頂きます。市会議員の選挙も我々の圧勝でした。これも先生の力です。」

市会議員の選挙では、菊池の属する「大同派」が大勝した。その勢いで市長選も勝ちとろう、というわけである。

「みんなの気持もわかるが、私には義塾がある。これを捨てて政界には出られない。」

「義塾は、もう立派に一人立ちしています。義塾の生徒も可愛いでしょうが、弘前市民はもっと可愛い筈です！」

「市民のために」「弘前市のために」といわれて、菊池も考えざるを得なかった。こうして市長選出馬を決心した菊池九郎は、市民の圧倒的な支持をうけて初代弘前市長の椅子に座ることになるのだが、それも、僅か一年余りで辞した。わが国初の、衆議院議員選挙に出るためである。

菊池等が関係した団体「大同派」では、かねてからこの選挙に、候補者として菊池や本多を予定していた。ところが、当時アメリカにいた本多からは「私は宗教界に進みたいので、政界に出ることは断念する」という返事がきた。そこで弘前、中郡、南郡、西郡を選挙区とする第三区からは、菊池九郎を候補者として出し、圧倒的な勝利を収めることができたのである。

こうして、菊池は、第一回から第九回まで、連続九選、十八年間にわたって国政にたずさわることになるのだが、考えてみると、市長といふ衆議院議員といい、彼の場合、いずれも本人の意志というよりは、周囲からの強い要望によつての政界入りであつたといえるだろう。

一八九七年（明治三十）、菊池は山形県知事に任命された。山形（庄内）は、若い頃、奥羽列藩同盟で走り回つたなつかしい所だ。菊池にとつて感慨深いものがあつたに違いない。彼は、着任早々、県内の巡回を始めたが、質素な服装にわらじばきというその姿には、県民も大いに驚いたという。また巡回の途中、かつての同志達と会い、戊辰戦争の昔語りなどして、再会を喜び合つたのである。このような庶民的な態度、そして維新当時の菊池との関係から、反対派の人々からも極めて評判がよく、津軽出身の菊池知事は、「恭謙温良の君子」と、広く県民から尊敬されたのであつた。

一九〇四年（明治三十七）の第二十一回議会で、菊池は改進黨、進歩党両党の推薦により、全院委員長に選出されたが、政治家としての菊池について、ある政治評論家はこう言っている。

「菊池は、かつて東奥の西郷といわれ、人望すこぶる高く、これは工藤行幹（同じ津軽出身の代議士）も遠く及ばない。大隈重信は彼の事を『菊池九郎は名士である。その人格の秀れている点では、数ある代議士の中でも抜きんでていた』と述べている。代議士の中には雄弁や術策のうまいのは大勢いるが、菊池のように、人徳の立派なことによって大衆の代表となるべき人物は極めて少ない。推されて全院委員長となつたのも当然である」

菊池は、この全院委員長を花道として、政界から引退する。六十二歳であった。このあと、氣候の温暖な神奈川の湘南海岸に住み、すべての公職から離れ、ゆったりとその余生を送るつもりだったが、一九一一年（明治四十四）またもや乞われて、弘前市長に就任する。というのは、その頃、弘前にあった「弘前結社」という政治団体が、内紛によって二つに分かれ、市民をそっちのけにして争っていたのである。見るに見かねた市民の有志が、「この混乱をおさえる事が出来るのは菊池先生しかいない。」と、しぶる菊池を無理矢理説得して担ぎ出したのだった。

第七代弘前市長として二度目の就任をした菊池は、財政整理や人事刷新などを断行し、乱れた市制を一新して市民の期待に応えた。しかし、翌年（一九一二）には、盟友本多庸一が亡くなり、またその翌年には、彼の創設した東奥義塾（当時は、青森県立弘前中学東奥義塾）が、経営難から遂に廃校となるなど、その任期中には悲しい出来事が続き、さすがの菊池も大いに力を落とした事だった。

教育家として、また政治家としての功績のほかに、りんご、梨などの果樹栽培の奨励や東奥日報創刊など、産業、文化、経済といろんな分野で指導的な立場にあった菊池も、一九二六年（大正十五）の一月一日、神奈川県片瀬の自宅で亡くなった。八十歳であった。

一月十一日には、弘前の東奥義塾（大正十一年に再興）の講堂で、学校葬による葬儀が行われた。石郷岡文吉弘前市長、笹森順造塾長をはじめ、関係者多数の参列があり、弘前市始まって以来の盛儀といわれたが、これがまた、本県中等学校で行われた「校葬」の初めとなった。最後に、菊池九郎の、人間味溢れるエピソードを、二、三紹介してみよう。

先生には、年頃になっても嫁を世話する人がありませんでした。それは「脱藩者」であったからです。八木橋という家の娘を貰いに行ったが断られました。仕方がないので、姉が嫁いでいる山田浩蔵の妹を嫁に貰ったのですが、先生はあまり気に入っていませんでした。然し、姉の為に我慢していたそうです。その頃本多さん（庸一）は藤崎に住んでいましたが、その事を心配し、毎日のように先生のところへやってきて、いろいろ説教したという事です。

（佐藤 要一）

私は、六歳の時に父に死なれた為、伯父である菊池家に引取られました。多忙な伯父は、あまり家に居ませんでしたが、それでも家にいる

ときは、少しものんびりしていません。小包の紐が落ちていれば、丁寧にほどいて束ねて引き出しに入れたり、裏へ出てりんごの虫をとったりします。衆議院議員や市長という肩書きはそっちのけにして、道路に落ちている馬糞をひろい集めてきては、りんごの樹の肥料にするなど、よく働く方でした。伯父は、誰にでも親切で公平だったので、家で働いていた下男などは「旦那様の為なら、死んでもいい」とまでいったものです。

（菊池 知学）

明治二十五年頃、私は東京の先生のお宅に、足かけ三年ほど寄宿していました。そして、この家では、主人、家族、雇人などが、みな平等に仕事をしているのに驚きました。たとえば、ランプを掃除したり、雨戸を開けたり、使いに出たりというのは、普通は書生がするのに、ここでは家族の誰でもがやっています。食事のときも、先生、母上、書生、女中までがズラリと並び、主人も女中も、みな同じ物を同じように食べているのです。食事の時は無言で静かに箸をとるのが普通ですが、この家では、家族が談笑し乍ら食べます。平生家族と語り合う時間の少ない先生が、この食事の時間を利用していたのでしょう。ただ、西郷南州（隆盛）の話になる時は、先生は箸と茶碗をおき、両手を膝の上のせて話をし、終わると再び箸をとって食事しました。いかに西郷南州先生を敬慕していたか、この事でもよくわかると思います。

(船水武五郎)

参考文献

長谷川虎次郎『菊池九郎先生小伝』一九三五年(昭和十) 菊池九郎先生建碑会
藤田本太郎『菊池九郎』「郷土の先人を語る(2)」一九六八年(昭和四十三) 弘前市立図書館

出典…弘前人物志編集委員会編『中学生のための弘前人物志平成十五年度版』二〇〇三年(平成十五年) 弘前市教育委員会、七二・八二頁